掌編小説

かわいいお客さま

片岡　弘

昼下がりの県立病院前の通りは、けっこう車の行き交いが多かったものの歩道の人影はまばらであった。道に沿って植えられたハリエンジュの木が、あたかも白い蝶が群がり垂れ下がったかのように花を着けている。この季節、新緑の里山を背景に、街路樹のある街の風景を前々から描きたいと思っていた私は、昼過ぎから病院前のバス停の軒先を借りてキャンバスに向かっていた。ようやく晴れた初夏の日差しは眩く、じんわりと汗ばむほどの陽気であった。

そんな並木の歩道を、学校帰りの女の子二人が連れ立って、なにやら話し合いながら歩いてきた。小学校四年生くらいだろうか、一人は痩せぎみで少し背が高く、もう一人はぽっちゃりとして眼鏡をかけている。二人とも言い合わせたようにブラウスの袖を捲り上げ、長身の子はクリーム色の、眼鏡の子は薄いピンクのカーディガンを背中のランドセルに羽のように着せている。彼女らが朝家を出たときは、たぶんまだ肌寒かったのだろう。

「見て、見て。このお花、きれいでしょ……」

私から十メートルほどのところで、背の高い方の子が急に立ち止まり、はじめて気がついたように街路樹の花を指差した。

「ほんと、かわいい。これ何てお花かな」

「ニセアカシヤ……だったかなあ。たしかそういう名前。おとうさんに聞いたことがある」

眼鏡の子が、「ふうーん」とさも感心したように頷いてもう一度木を見上げ、「かわいいっ……」と爪立ちしながら花の方に手を伸ばそうとする。それを、あわてて長身の子がさえぎった。

「あっ、だめ。だめよ、その木は……刺があるの」

「ああ、びっくり……しましたわ」

そういう眼鏡の子の言い草や姿態が茶目っ気たっぷりで妙に大人っぽかったからなのだろう、二人は可笑しくてたまらないという風に笑いこけた。

ひとしきり快活な笑い声を響かせたのち二人は歩きはじめたが、すぐ前のバス停の軒先で絵を描いている私を

見つけて寄ってきた。

「こんにちはー、見せてもらっていいですか」

二人が声をそろえて言う。黙って後ろから覗き込み、知らぬ顔をしたまま去って行く大人も多い。その失礼さにいちいち腹を立てているわけではないけれども、彼女たちのこうした挨拶には好感を覚える。「どうぞ……」と私は答えるが、自然と顔に笑みが浮かんでくるのが自分でもわかる。

腰掛けている私の背後に回った二人はいきなり、

「すごおーい……」

「じょうーず……」

とそれぞれに声を発した。彼女らなりのリップサービスなのかもしれないけれども、悪い気はしない。私にとっては、ちゃんと絵を観てくれる大切な可愛いお客様なのだ。

彼女たちはしばらく黙って私の筆の動きを眺めていたようだったが、一人がふいに

「おじいちゃんは、絵描きさんなのですか」

などと言う。相手が孫のような子どもからでも、絵描きさんなどと言われるとやっぱり面映いから、「とんでない」という否定の意味もしっかりと込めて私は答えた。

「いや、いや……まったくの趣味ですよ」

それでもどうしても言い足りない気がして、さらに付け加えた。

「町の美術展が七月にあるでしょう。そこに出そうと思ってね」

すると別の一人が言う。

「どうすれば、こんなに上手に描けるんですか」

子どもは実に単刀直入である。

「うーむ、そうねぇ……絵を描くのが好きだからねぇ、描いているのが楽しいから。上手かどうかはわからないけど……どう言えばいいのかな……まあ、ほんとに描きたいなぁ、ってものを見つけることが、いちばん大事なことなのかもね」

ちゃんとした答えにはなっていないのに、彼女たちはいかにも納得したように「ふうーん」と頷く。そうやって十五分もいただろうか……。

「ありがとうございました」

やがて二人は言い合わせたように私に向かってぺこんと頭を下げ、スキップをするような軽快な足どりで、ニセアカシヤの街路樹の下をアーケードがある商店街の方へ去って行った。

（かたおか　ひろし・研究所所員）